武江年表

一

リ 5
112
2

明 5
112
巻 2

寛永十四年　丁丑　三月国

三月天海僧正志願ありて切經二千卷を刊行せしめらる　此年

てを見る正保二年ものいとりて滅絶せしいふ　○六月荻生元甫率滅者の後を云ふこの年以迴漢

の祖文なり　○七月八日星月を乱く　○十月肥前の国原の耶蘇

宗ふの去擇紀伊翌年二月漢紙あり

○江戸中風呂屋女二人殺りふ命じぬ　此捉を殺りしものを吉原

大門の外ふ磔せる

同十五年　戊寅

夏より冬年二月以ふ至るまて遠近の男女伊勢宮詣

流行る事殿　をびただしきまつりけり

同攻會印

○東光山西福寺神田蔵うり濱茶屋始まる

○十一月品川小笠松山東海寺御剃立　冨山侯　菴和尚

○今年以来雲国の貢を止めらるゝ云

寛永十六年　己卯　十一月閏

幾府御城廻の書院番へ命せらる

○高田藩家法　冨山侯貞義和尚濱茶屋あり

同十七年　庚辰

正月日光山廿五回御神忌万部修行有○正月より八月末迄雨

天下牛馬多く死す○然頃何某侯つゝせ御用方茶屋

いつる矢の年　十六　男色の流行細狂猶と

いまを切害しけるに同月それの日迄より命せられ濱茶屋等の

下駄の自害をのゝふ下駄方茶と男色の繁りあり○同藩永川

茶女と出つる矢の年　十八　も多く有て俱に自害して失るを世

世のうつりかはりけるとて　世の中

嘆いの花咲き月ふたたびてあらわれ出るまつ

茶女禁世の事

もゝとせ行いさゝか家もとあり死のいをきてこえんとその山川

と頼素を恋しつる藤屋紙屋とのつる茶紙一冊巻を養ちふ法をて生

作者の詳なるを窟の編の男色大鑑ともに巻を載せり　按ずるに巻末西

濱茶屋西福寺の躍りあり○此の事あり后文政西くうり貞享年今の地うる

る死の跡曲亭馬琴ちう浮を作り巻末のあとと題して生人考の浮へ送れりしを今

西福寺　○六月長宗公耶蘇宗の猿黒船一艘を長崎へ漂着のりの

六十余人を捕せらる○九月六日法殿山ゆ

夕雲を消こゝろまん本の石とうたゝさ一色さ海紙の月　沃菴

寛永十八年　辛巳

正月廿九日夜桶町より出火翌晦日迄へうけて焼る町数五十七町武家
ゝ百二十軒殺傷者以外の大ひゝと成の元一

○法泉寺国二百七十巻成就　林道春先生主張儒士および
五山の僧侶撰あり一とあり

○東叡山寺大師院く巡行執事繁る　上野山源天神社へ満天神
を合祭る○柏木村円明寺住持再建

○二番村を寄る通町と号る　えの字六ゝ又改て小川町といふ　○泉岳寺堂宇構造ゝ出来る痛へ
稲さる○青梅宮原塚より出る宝宇へ移さる

○七月　長命ありて経山生年を権現縁起撰述あり後八将軍
立馬の業あり○秋茶敷樹不熟○八月朝日大風数十波の石

船取川沖に流む　後流人この石を根と号一漁猟す幸あり一とあり一説に寛永十一年
八月廿日伊豆国根府川より大石を積出し一ゝる船沈没せ一処を根と
号る　○八月津国高槻宮寺五仏堂ゝ観音像を造　興隆代記に曰
宗海上人とあり

○北ゝ海相模市汐　三浦浜
小地

同十九年　壬午　九月閏

正月朝日大雪○二月大雪○二月十九日深草ゝ焼亡　此時本村宗素
を聞く故稀なるの石法書不ゝ流布されて　とのよしの古物ゝ
あるいはゝ此地ゝ此ゝ門おゝの類ゝ多ゝ

○二月ゝ七月ゝ天下大飢饉米価貴騰一死人多一古数米
殘を出る○五月流行勅令代始る

○夏激下伝導以ゝ下向あり五月初旬出帝治の日澤庵師一宗要を
易あり山事曉ゝ出る○二十二間堂始ゝ造家ゝ建　基三人形あり習町
弓師法橋八手縁橋
正ゝ法ゝ立人あり法壬辰ゝ出ゝ造宮あ一ゝきゝ敷ゝ分傍ゝ心の孤美ゝり

とり市令蔦于をぬりそとに張家の絵ものをつのりてつひに成就せずそうふる
親世者と八幡宮の小矢場いまりの弁体八傍正庄寄附ありしところといふ
○あづま物語拾遺　吉宗鑑見記の始まり

寛永二十年　癸未

六月朝鮮人来聘　正使尹順之副使趙絅従事申竹堂張彼女楚客ちまりこのとき申竹堂ら不ふりて林春斎書徳二世人生年初る師巷を著さと
ふり　○今年六月羅山生春斎ふゆくともふ山王祭りを看るの記あり出生ふ集小員人西　○羅山書簡二世人生上京発来記行あり
○八月永代橋八幡宮参詣始ふ○十月二日天海僧正寂　歳百二十三といふ
二月ふり鬼海門坐法門跡公海僧正法経職あり
○十八年の冬ふり今年まで飢饉続ふり○ひつまめ（ひつまめ）板橋二宿
始書名を色青鳥と云一世ふ代八氏時代弟と椿の花を表ふ沙ふ中ふ
ふりを巻ふり色とハ椿の色青ふ鳥ふ鳥ふるよ柳ふ義の性ふり
記ふの名ふを記ふのの氏書を始ふ氏

世年間記事

井上稲富ふ家大筒の町図を試らもしふを後藤三ふ浜砲測といふ
○正忠記弁ふ天八寛永中天海僧正の墓ふ三ふして比叡山の麓行生源
を接ふふんと要ふ谷行某廣源僧正ふ熟熟ふるが成後茶川古書記
の手ふ人見をして公用ふ為ふて信地ふ山を築しあふふ而ふりといふ
○弟久保八幡宮神再建あり○佛日山東福ふ寺ふ平麻布吳服
坂ふ寺剃ありしふ寛永中今の宮崎の地ふ移ふる霊十南ふ人寺墓
のちなまを八坂の名を去ふよりぐり
○寛永中ふ月谷一行院寺養ふ寺参上人寂　姓八市井氏仲養の奴隷ふして
吹手僧ふふり不日位ふを降行ふを不ふを不日谷と云　○海鼠橋ふり松屋橋孫正橋迄の川通り八丁橋なり　寛永中船
通用の為ふ不ふ八丁ふ橋通ふ通ふ一所と云○同ふ正動宮動坂の手廣ふ

ありしを其地を今の所へ引下しぬよ

○寛永の頃まで神田佐柄木（さえぎ）町雉子町の続きに堀丹後守殿広屋敷

ありし丹後殿前といふを略して丹前（たんぜん）といふ此辺風呂屋多く美艶（びえん）

なる湯女（ゆな）もありて客に遊ひしむ其人々のさまを専ら歌舞妓に学ひて

丹前風といひしよし諸書に見えたり元吉原ハ此所に移し川　堀家の広井記寛永の末正保の頃下谷へ引うつり屋敷の江戸図東の脇に戸田侯の広井記に残りたり

○寛永九年梓行（しかう）の江戸絵図ありひやう町

より先神田明神町と皆海辺（かいへん）なり後に新地を築立てしたり今の

深川の所ハ江戸名所の水上にあり　古に記せる其長の併と見て合はへし

吉原町ハ廓内に江戸町すみ町京町新町けんさき町と有り　延宝二年の町にもけんさき

と丁　思案橋（しあんはし）ハ今の荒布（あらめ）橋と見えたり　今小網町にある荒布橋ハ昔のしあん橋の所にあるにや

浅草御門内に村松（むらまつ）町辺に寺院武家のこりて町屋なし　寺院ハ雲光院并に今ハ其地に移りし

多ん方坊天岳院なとけんこう新地に清光寺知足院なとあり　東神田の地も武家寺院の所となる法恩寺

今の茅場町薬師堂のある所に長く今ある寺院けんしんた所也　智徳の別に住し乃場神田のやうし有り

ありし同所向より南八丁堀まて殊に寺院多かりし　大坊ハ慈眼寺今の不動院ていれいと薬王寺

上行寺円覚法寺十日ありせんと大正寺ん弘法寺宗院なと大の多門寺王せん寺

観音寺日蓮宗大の寺ともすいこうと本りん寺せうこんし永りんしま法寺大なんし其か

りんと海らんとアんせんとあんたいと戒寺大向寺法性寺薬師寺大せんし大せんし顕性寺

法おんとありたり　○今の深川橋向小八丁堀小島田深川後屋敷ありよんて橋の名に

残べり　町名今と遠へる

ハあし町　今の日本橋　十軒店の辺　志屋町　室町三町目西よと町　ごふく町　今銀町と

十軒店の所今川橋迄　六十間河岸　大伝馬町裏今云堀留　青物町　今本船町と後河丁の辺あり

東裏　ふき屋町　今の金吹町　さんちやう町　今小網町　うきやう町　今小舟町貝杉子店辺　大ふね町　今の大伝馬町二丁め

新材木町　今長谷川町　さかい町　今和泉町　ひやうや町　今芝口　白川町　今新乗物町丁の辺　めうさ町　神田多町

の頃　新小田原町　三河丁の頃称え有や多くありし店なりしに　志んあん町　今の小伝馬上丁の辺也以後の場所ハ大坊舟

称え　　丁と志せり是ハ囚獄の所の辺る所の

辺ある又ハ古頃の称　此ふくいるある也　志あり橋町　宇田川丁并浜丁の所　同朋町　芝神明の前にもあり　大橋　今の両国橋

後藤橋　今呉服橋あり寛文この図ホも考え記せり　二ごくじ　今の石川高あり

以上寺院の号町名文字詳あらされい系年ホ概りて仮字のまホ記ス

○江戸絵図梓ス年ハ寛文ホ始りしあや真とり以ものの世ホ

作ゝ江戸社代の図ヒ南ハ世く橋上ヒ世ホ始り西ハ世く橋ヒ端ホ始り西ハ橋端町の

入ハ海浦ヒ始りハ小川町神田川流茶橋ヒ始り東ハ大川ヒ始り

て載る所の方域狭し　義頭浦磨の図もこれホ同し　寛文ホ始り江戸ホ廣くなり

○世上通用の書籍の記ス所ホ一筆啓上致し候と書く事ハ始り

始ると見えたり女子の一筆と書ク事ハ古代ホ多ク

ありとかん　東海道膝栗毛ホ見えたり

○本村氏十郎ヒ致ヒ續武家閑談　云　校訂ハ寛永の末ホ江戸ヒて

お来ス所ヒ寛ハ狭斗といふものを用ホ見さく芸ものス浅田長門ヒ

始て製ス葛籠も稀ホ一ヒ学ホ当番の徒士衆具を本絵袋ホ入見を

番袋ヒ名付りヒ世ヒ始ヒ云く

○薩摩小平太　泉石堀の産　或紀伊産ヒ云　江戸ホ下り中橋ホ於て操ヒ所を興行を

発山先生向陽漁耕の三子を誘引して九州ヒ遊ヒ先生

文集ホ載ホ所ヒ予ヒ声曲数篇ヒ作せり　○事跡合考ホ浮世絵

浮世絵師人形ヒ一世ヒ盛ク寛永元年以後迄ク京大坂ヒ下りヒ

しものヒ云ク

○花浮踊り　ひんざ節　ちやり所　撥あどいふる小唄行る　長崎女郎元ヒ

時代より始ヒ　貴賤諸ヒ富ひ情花ヒ弄ぶ事ヒ行る　あづまめぐりホ寛永の頃

うんだなどこひできせる親世ヒあまひ今春ヒ云　きんとわ女の羽織ヒ文ヒうけて乳ヒ

○中島浮雲ヒいふもの江戸ホて求肥飴ヒ製し始む

○春蓋獨語ホ云寛永の頃風俗男ハ草のうちうけ草の袴ヒ

笠張り女は紫草の長繻袋をもち紙結びにせり婦女乃
帯は今藍を染羅の帯にして黒地に梅樹松を織出し縁付て是を
紙の上に帯にして多分は黒地に黒の縞を付て長さ
紙をんにして縁あど入る事あり二月より八月まで婦女の礼服
は縁あり長さ鯨尺の八寸なりを後に結びてたるを付帯
といふ今のやうに帯は背の帯よりも長し中略男女の衣服皆
極て質素なり男子も女子も十二歳まで髪を剃ざるに
むしは鯨尺にて七八寸を極りとせり貞享の比より鯨尺にて
なり丈なりも長くまいらく長くありて近き比は二尺に及ぶ
なりぬと見る婦女の帯も貞享元禄の比よりも遠く長くなり
て今は鯨尺にて八九寸に及ぶ綿をもんで褥のごとくにして

肩衣といふものは昔は麻の幅鯨尺の八寸計なりしに貞享元
禄の比より幅三尺に及ぶ寛永の比は婦女細き麻縄にて襞を
造りて用ひしを後麻縄を止て紙にて元結紙にて造りしを
用ひ婦女皆是を用ひ支度なり絹にて巻事も止ぬ中略江戸の婦
女は外に出るにむしろにて巻き絹にて巻き裏面を包み目だり
あるものにて其後絹にて裏面を造りみしに家二十あまり寛永
の比なりき今は中ちいさき死絹を裏にふいてきるのみにて面をは
らもさらにもやう成都にて道を行中略男は面をあらはし
りの袴に裃に編笠の肩の上にうるまをうるに脇にうるに女の
あらく帽子をうりて面をうるに裃にあり老の比中に後面のあらく

ある物をつくり付て同計りをあるもして是を汐もあり亦此汐の
男ハ小袖の裏を紅ゆ〜或ハ紅の肌衣を袖に出ふして袖をまくふ
計ゆ〜るひゆめうるるりの女ハ貝ん西如くうりて縹の裏ゆ紅裏
あとを見るめり（下略）足ハ質素永の比とりえ孫の比まての風俗を云
きゝなり（その比婦女の塗笠小袖の縫箔六尺袖きま〜阪中家菓の
見繁ものゆ山東の骨董集奇談考ゆつまひ〜ら人）
○八水隨筆ゆ云世ゆ素湯の袖を切て上下ゆ〜ゆ〜ゆ〜ハ松永深
四ら始らるとい〜ゆ事よく人の初る西まり麻上下の袖を切〜ゆも遠
うゝね事ゆり裏付上下ハゆ堺遠見業の給仕をる小性ゆ始て云
せゝきゝ〜ゆり弘まりて今常袖ゆまり夏の肩衣ゆ麻物を用
る事ゆ松平豆州侯ゆり始る袖子肩衣ゆ裏を用ひ〜ゆ小姓
遠及侯二男改尹ゆ〜ゆ〜まるといゆり又老人雑話ゆハ（村書房編）肩衣

半襟ハ迎湯（ゆ）ゆ山ゆ始まりゆ〜ゆり
○木綿長襦袋今の製法のゆ〜ゆるハ書見ゆ家の母始て製ゆ業ゆ
ゆ初ゆ〜ゆ始ゆ〜ゆ〜れ〜ゆ老人雑話ゆ見ゆ元ゆり
○答問名録ゆ五常家昌寛永中大西村長兵衛清兵衛を連て
江戸へ下向ゆ（坂東ゆ）大西ゆ所左衛門清兵衛ゆ江戸ゆ下り昆布ゆ
年店答問ゆ〜ゆり坂東ゆ下ゆ〜ゆ孫代〜江戸ゆ住ま
○寛永ゆ頃大伽ゆ町の豪家伝ゆ〜ゆ家ゆ娘女さけといゆ
仁慈の志厚〜朝夕の飯菜菓蔬家食ゆつ〜ゆ物を乞ゆ人ゆ絶
〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
食〜常ゆ粉名ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
以茶湯酸山（ゆ）ゆ茶湯〜生ゆ（ゆ）ゆ大日如来を拝せんゆを乞ひ〜ゆ

日ゞ歌客を肴んとあつまる江戸ゝ賑きて佐久間某ら婢女たけを加
ひて〳〵しく靈験の告を蒙りて彼家ゝいとり作女を浄土宗に改作
女人会弘二願ゆして大法華を写しとりて彼佐久間の親ぞく
る迷菓とり大日如来の像を造〳〵めて湯殿山英合寺に納む
こゝを世ゝ佐久間大日如来と云 佐久間の墓は塔中に光院ゝあり〳〵盤
彼家の水盥ハ今も光院に有也 ○寛永の比泡盛といふ和俗町ゝ落をとり〳〵る
ゝ〳〵べ集りて寿遠ひよりさいよくさいやせり今ひてくのひて
氣遠の名月とあまり此泡盛をやさまてく躍るゝ吳服ゝして
人の笑ひをうさ〳〵む後萬菊の古人躍念佛として江戸大流を
湖洲まてきさ加ゝ打ゝ〳〵あてく彼泡盛のさ加ゝ仍りてそ
泡盛念佛ともよびけるより世る流ゝいてり

正保元年　甲申　十二月十六日改元

正月廿日浄瑠璃太夫吉島兼三郎重縄七十三歳墳上ゝ涅槃石を彫
○寛永年中孫泡盛向于泻百ゝ沼方の地を掘ゝ細村の漁人ゝなり
〳〵今年二月漁家を建立〳〵年毎の名を以て細高と号〳〵年國
の産土神佐右明神を奉祀ゝ
○上野ゝ慈眼大師堂浄建立 比叡山慈眼大師の法号なり ○青山治部左衛門刺
○二月町人の長刀也紀兵衛納の合羽を佐藤止あり又俳諧大山家
布堂を字〳〵てる〳〵ゝ事を傳ゝ
○五月十九日琉球人来聘 正使金武王 副使豊見城王子 ○清朝順治元年ゝあり明亡ひて
一流ゝ ○本橋町六丁目長村長兵衛芸者始る二代目より後山村
長左衛門と改む 正徳元年ゝ改り芸者ゝ絶ゝ

○十一月十八日右京亮基人卿死す（六十九才）今も深川霊光院に墓あり○十二月廿六日明人呉宗観卒二年桜上行寺に墓あり明朝の乱を避て来りし人なり○二十三日雲洲人吉師彼長ら撰定久賞つゝ交代す（久右衛門は完初半を建さるものなり　庫治久右衛門と号し今ふ未漢せり）

正保二年　乙酉　五月閏

二月十九日月赤くして丹のごとし○二月廿二日因幡坊右帝国宗通世しして空仁と号しけるが世一者あるて卒（後鑒の法世の初る所に墓あり　東京の山中観成院ふあり）

○名誉鞠田明祐法華堂より山谷へ移る（山谷ふあり　深川院もしは時雨の岡移る）

○江戸にて始て鬼を焼く（長氏某中氏某ともいふ）○十二月二日長崎に於て卒（八十三才）○十二月十一日東海道漂着和尚寂（世寿の七十三才に成頻ふ送僧を請て師等を立て美の字を書て最

十月漢土兵乱未止ず明の隊長平戸に来る（鄭芝龍と云ふ世祖の父）○平戸に滞松右宗剣（長山藩稲師　宗基の家人危なり）卒（邦へ接吾を携）

○金工平田氏祖近江卒（長中朝鮮人なり七宝流しの法を伝へ人之）

○大名藤氏伝祐右霊府祐廟小倉中殺生を禁ず（龍戸村）

同　己亥　丁亥

二月六日小塚遠江廣卒（茂京及一蘭髪の号宗甫今年六十九才之家祝孤山窓菴ふ蒙ず右田儀羽の門人茶道目利の人和平の次泉為祝々の臣門人之廣安ハ　遠江廣甲斐守之）○己月十九日亟月の暈に方月氣のごとく晩の月に現る

○己月廿日宮医碧迪院国卒去治法市卒（廣尾祥雲ち　子蒙市ず）

○五月十三日江戸大地震上野大佛の像破る○七月廿二日氷隆（大サ樓）

○九月十五日刀剣目利本阿弥広定卒（織田家ふ仕へ一人なり）

○十一月十三日　台命ありて王子村に於て松平薩州侯大猟有
真行あり　当日東叡山十三月山十月之年塚明神の辺り
しゝいくり林立赤だ迫あり　一老編輯あり
○十一月巽稲荷森に向ふ地蔵尊建　世春海法下造立の前奥に
湖乃水にて乃湯水建一所あり云云

班年間記事

正保中日向巡領浦山の瀬酒を薩州侯大坂へ送せ大坂より京
へ山元沢氏内宮士山鶴角と名付しのゝ大内に止めひ西向無
三　唐松の二種八月磨二年の沢武江に下れ来り接ぎして班
忍ぶ名てり　○大橋を常盤橋と改めしれ正保の始沢あり江
○十河ひとえ家をぬく事たる十河屋とい武家の人の沢
法きとりいひ知る事と其又班時代流芳意城髭を好む東海道
名所記ふうい髭を雲中の声に接りとつくことといつるハ松中の声

ことハもんとたねさせるを以ふ洞ありしそ
○世事談に云ふ時代京室町髭の久吉俗に髭の沢を賞始むを後
二條市中宮賀瀧多の五十嵐是を創まて江戸にてはの大好菴
髭中尾庵の弟云ふ寛文中室町三丁目（三尾庄方
中村ゑま伝髭沢見世を初くこれ沢庵の元祖ありへしとあり）いろまち生ある未詳
寛永正保の沢人の髭立の児中髭あるへしとあり）
るいまゝねるさうとしけるより藤稲荷森ふんえうり
まこ沢もいの寛中ろの髭中ハ沢沢を分ろうそ
○寛永正保の沢長崎より唐本の商人和泉屋平三郎といつるもの
江戸に来り沢の髭ふ沢し始て古書籍の賣買をなし後大書肆
ゆ成さり見古本賣買のさ〳〵わこと来
○或古家の記に正保年中江戸図の写本あり方城を廣し中川
源兵衛南蛮梅本雑司谷辺迄ふいろり東八大川を隔りて市中の景

寛永の図にもしるし當中洲弟子屋敷戸門を敷屋敷の隅に下水あり居あり日本橋の西にぐりん塚といあり芝中二浦坂の辺二浦
毘沙門堂古蹟あり本願山東向に門あり門前に茶屋あり正
町ゆきいくるあり

慶安元年戊子　正月閏　二月十五日改元

慶安ゆき改元あり〜を

改年の法度安穏の天下政　羊井ト養

○春荒蘭山に亮朝院七面堂再建あり　寛文十一年今のごとくなる由いうつさる
○谷中光命院七面堂勧請　長山日翔上人と二沢の房主父七面堂の石
○正月十一日天海僧正の忌服大師と追号をなす　業平一族を祭り一社を創建と云
○日光山三十三回御忌御法会法華八講あり　業平の系編法元僧の元あり

○五月男色をむさぼる御禁令流行する事を禁ぜらる此時行業
廉義といつる英才年の事に分潔動に及ひしの前後拘法に
いつり男色のゆ世ときとり止寛文の頃にいつり又行世しるしあり
ありて止てるよ〜同書にいつり　昔の方に云に男色を云ふ及流世逆と云ふ及
流及と云ふ及流の及此及と云ふ及此所の及と云編発
ふてた
信云ふり
○九月吉田姫稲荷社建立　業林業次と
云人寄附況
○江戸中風呂屋の遊女法制禁ずあり

同　二年　己丑

日暮里飯盛明神社造営　昌と云ふ終の系
初ありしと云
○大塚善門山大慈寺再創
○三月二日将軍立て尚振軍　正十七年一本寛安
三年正月七日此云
○　麻疹流行せ
○六月廿日武蔵大地震江戸中武家町屋潰死人怪家人多一　上肥
大仏
後庫一いこの
ときこともの
○五月十三日江の紙大叡隊　業井二行小八
平女人の義元

○八月廿日江戸大地震○九月琉球人来聘（正徳異志に見えたる川上子なり）日光山へ参詣

寛安二年　庚寅　十月改

二月山王権現社　御城内より麹町へ移る（一説に寛永七年移るともいふ後万治二年今の所へ移されしなり）

○男女御勢家富へ系譜ある事行る（今云おなじまりあり）

○三月廿二日夜江戸大地震あり○四月十二日俠客幡随院長兵衛死（長兵衛人に不勢多江とゝもに終くしてゆゑあり後撰墓は今も浅草源空寺にあり弁舞妓りの年回を吊へり）○五月国々洪水

○六月廿日洪国毛隙（長廿又寸）○六月二日より浅草寺の観音堂に普陀落山（東叡山　御宮御遷営　四月成就落慶を御再建ありしとい）

○二月十二日特牲山霊牽（六十三キ　拓足形）○秋深川八幡宮にて獅子屋の法式をうつし流鏑馬奥行始る○中村勘三郎芝居称宜町へ堺町へうつる○十一月廿九日井の堂鄙踊流行せしる

○十二月廿七日節中歳変る日長上人寂

延寛二年閏記事

酒戦といふ事行る慶安のころ大塚の地蔵坊稲荷池上の大蛇九度源左衛門級名せし大酒の案堂を造ひて酒を吞し事あり

○頭巾を記しる水戸記といふる冊子あり（此書寛文二年水戸行せり　池上氏正義稲荷の事ども）

亨保考ふ月元年又川崎稲荷の田庚虎ノ子孫なる孫左衛門なる七名入のきあり中ふ狸くの落の落絵あり

○貫不日未兼変の記まて今眼夜醒といふ事後河町夜醒町乃

[illegible]の高人一朱もあるく金子一分二分つゝ錢或かめくの[illegible]
[illegible]の錢弁賀[illegible]時分年々[illegible]
の町々来りてとのくゝる事あり足袋屋町[illegible]通り町南北に町々[illegible]
弁錢[illegible]て数百人各こゝ[illegible]くみつゝ肩ぶりけ[illegible]てかゝしき[illegible]
を数十[illegible]のゐいゝ[illegible]る事ゝ青物町[illegible]
て徳[illegible]を交ゝ[illegible]九十六ゝ年数の錢を粒銀[illegible]て金子[illegible]
も自ゆゑ[illegible]
[illegible]の[illegible]
見世[illegible]
○[illegible]の時代毎年七月盆中[illegible]ふいられ市中の男女踊[illegible]を催し夜く
張り○浄瑠璃語[illegible]

あぶくや義[illegible]
[illegible]

義[illegible]元年　壬辰　九月十八日改元

正月廿日の御[illegible]年[illegible]十一日[illegible]滅る　十一日曉雪降[illegible]

羅山文集

餅餐座上甲冑鑒　時有寒花發盃酢　鐵額銅頭愛銀否

雪如白馬祭虫尤

○品川寺水月観世音の堂を修造し海照山品川寺といふ　弘法大師
安亜有しる永禄十二年の[illegible]火焼もて[illegible]
今年[illegible]
○六月[illegible]
年[illegible]
○八月廿八日夜江戸大風雨

同二年　癸巳　六月閏

今年玉川の上水を都下に通して荒廃の用に充しめぬ

○玉川上水をくゝる所の方田及丹波山の幽谷に發し同じく丹波村を
過て武蔵及多摩郡に流る田及一の関より品川浦村迄七里餘支分
羽村まで十二里迄より六ヶ所迄十六里計ふして羽田浦より海に入る
元年里余 慶長元年の春玉川庄右衛門兄弟といへるもの承りて羽村
より江戸までの水路を考へ同十一月上旬より堀割の役を命ぜらる
されば翌己卯年初夏より仲冬に至り羽村より江戸大木戸迄堀割し
庄右衛門兄弟玉川の名を授けられ世襲して代々武蔵方市中
水分役として日用とす 庄右衛門兄弟玉川姓の始なり
○神田上水を開き一事ハ寛永年間始なり武徳編年集成に大久保
彦左衛門の言を交て永道を考へしより多摩川の清流を

小石川より引しめ給ふ初神田上水のはじまりなり 沿源流
玉川上水は慶長年中に堀割ふ所なり 玉川を助水ふ所なり
茅堂家より出る所なり 松屋忠左衛門 一説に七郎ともあり 俳諧芭蕉翁の弟子
善法寺流水 善法寺流水は俗に伝ふ 堀割の
もとして旧址を 世事世上に伝ふる所なり 俳家奇人伝に云ふ 俗に伝ふ竜隠庵といふ庵家あり 芭蕉翁此地を
て東武に下りしといひ又雑談 上の方に竜隠庵
さるに元禄の信神に至る迄 江戸に在ること一年に至て延宝二年なり
事なきにあらず
神田上水の井の所の池 多摩郡 辛礼村 若松池 目黒庵の旧所 姿の池 目黒
多摩川の分水堀の清流中荒井村の東に流れ合して神田上水の

助ケとある今ゝ地を家合村といふ（流れ家合ふ村の名あり）年貢村とり家合と十二村を經て多摩郡田村ふ流れ入り目白臺の下にて二つふ分て一流ハ服部ヶ原にて大洗堰とり江戸川ふ落ち一流ハ上ヶ原にて小日向を過り牛込榎町の中を通流をすつて年貢村とり家合ふ流るゝのゝ樋ゝくして流るゝを元樋と号ケ元流汐業ヶ橋を潜ひ小川町を經て神田ふ流る流ふ神田上ヶの名あり又一筋ハ神田橋うち竜宝橋とり本銀町本町辺ハ京橋を東ハ本材木町辺支國の辺濱町等ふ至る町数九百七十丁程ふ及ふ

支上ヶ流る通せさる前ハ赤坂溜池の水を引き隙所ゝの水溜ち流れをよゝうとふ引て用ヶとしゝうゝ強ふ不自由ありゝふ然上ヶの水ハ下方民遠ケ汲んで快樂の思ひをなゝ事疑ふ

御恐懼御きてもなきあるりあるりとやいまむ

○正月二日年始御門の門青山某ら狩女菊といふものゝ子ありて秘蔵の皿を破りて害せゝまゝ霊魂出ゝりをあせゝ事人信ふ驚多況まゝも未実否を知ゝ況ハ消命の況ちるへゝ

○九月琉球人来聘 正使池城王子

○金雕子古昆氏祖主次率 八十二才

○竹内式部易行院小侠客助ハ墓ゝ祈をるりの有函入浄心信女

第廿二年己巳二月十一日と號ゝ例ふ女の法名あり（文政享和文化中鳥手焉ゝ五年ゝるあり）

寄寄ゝ花芝居ふ浄ふ歌ゝ

ゝりの香花を抱く

第廿二年　甲午

浅草ち観世音開帳（内實殘を金三百五の入札ふ落ゝ賣浜せゝ）

○今年町奴御穿鑿あり（美の市ゝ長陽居大橋云ふ市ゝ長陽居大橋云ふといふる男御達ゝ号せゝ函堂ゝの名あり六方組ゝ号ゝ人市中をゝゝ）

喧嘩を仕うけ諸人の妨せしものの二六方組六方と云ものの弾指前の斉藤孝柳三郎
の用捨第ものを見て生死を去るべしこの男伊達の門山中源左衛門の心強事中
稲町吉法ちあて放切の時辞世

ひんざらまとふんぞるべいろりもぞろりの沉ぶかつらでるべい

とまた別に六方云ものこの時の町奴の名二十四人諸流ふ見えたり

○市村羽左衛門ちう芝居あて初まる牡丹云を始む初まる牡丹云こハ女髪を
うあて高系頂城買の辞を仕廻髪切高系坂田源系板額系
せしとり芝居の惣名を源系とこと云こと　この比上方より小唄三味線の類共をよび下せり

○十一月十八日将軍休伯長伝卒　七十八才

此年間記事

兼愛沖芝井町より西川まて浦伝ひ屋場石垣を命せ造ろ
歩まて築立ること有　武蔵名所考

○前〻より沼ふ云芝安の頃夏果て幸流き帝船ふて源こあるひ
底根船を拵へ出る流系川を乗越してもぐむ足船遊山の始りあり
翌年大分流も出る故仕出りなく大勢乗る故不流しとこ仕又翌年
大船ふ乗ハ出るもあり兼愛の比船繁りなくなる不流者の為年肩
江戸中の大小事後三ハ年船遊止む万治の比又〻流く船出り始
流人家を壊く船居く大く成る数ふ七八万の屋形船あり後船の
名をつけ川一九寛永九大寛九山一九鯉一九十万一九ものく名付る
弁高色〻英を云〻し御鷹年十人ものハ絵十年〻簾の隠く
掛けあ〻足を戒士のものとする云く　中古納涼看月の船大〻こ後を住居と
せる故活人も多く活不住まり年井ト養
拾帝集ふ三投
といふところ也

山もかう又船もあり川もあり数ハひとふさこころまこの系

同書云　文を異ス　むりハ女子要ふ拘とりる時ハ衣面といふ拘をうけて

彩を見せ候ゆゑ女達七夕已後他人ゆまこゝまで女子対付歯黒あり
ゆゑ後面をうるこゝ御廟の所近くあんめう稲元ろうきを焼てあり
しゆ万治の所ゆうり江戸中止む大火ゆゑ已後ふくめんの上ゆ歯ぶちと
いふ笠をうむり白鼠ゆ元もぶちと云編笠を用ひ所ゆ寛文乃
所ゆ松坂といふ笠処室の所ゆ熊谷笠ゆもそうあゆ八分五厘
笠を用ひ又天和の所貞享の所より編笠止ゆ菅笠ゆあゆ所〳〵
上下共ゆ菅笠ゆ成る云〳〵○大身ハ格別小身の人ハ侍元上下ともゆ
上下ゆ又ゆ袴計ゆして後ゆ元を元て歩ゆ出る人もあり又ハ袴の
こゝ尺ゆ拭あて辻花ーけく人もあり中間ゆ一寸あるゆもゆ袴
しゆある云〳〵 前〳〵あゆうゆふ氏ゆ世の風俗教事ゆハ〳〵
記りを年下ゆして世人の知るゆゆ畧ゆ
○稲毛所中九子村羽黒権現ゆ天正中の勧請なりゆゆ義慈の所奥ゆ今法のゆ

小哥三尺とゆ所中のゆうゆ中風を煩ひ見あゆて切歩叶ゆ歯黒て云所ゆ〳〵所終
ゆ 非人ゆ成この所ゆ来りしゆ岡社を祈りてゆ忌後の果報を切願ゆ歯黒地ゆ
切歩自年ゆあゆあゆて岡社ゆ来仕ゆて帯義を敬ゆ又治人〳〵祈願あゆあゆ所ゆ
江戸業を在の法人系治解集所ゆ所ゆ駅〳〵ゆ所ゆ書三年江戸大火の後自ゆ
おゆて年間
絶ゆりゆゆ○義慈二年刑行の江戸図ゆ無ゆ彩ゆ今小柳町の所あり
戒章法門内ゆ喰町の辺ゆ雲光院弥勒ゆ所今ゆ多ゆゆゆ
徳ゆ浦安ゆ世ゆゆゆ○所敬ゆ日輪ゆ知見院ゆ所祈田川の今云
新〳〵橋をゆゆゆ橋祈田橋を大炊後橋〳〵記り日本橋西後
ゆり南橋町近の町屋の内後後源左衛つ見後橋 迷宅 玄宅 弥菴南
屋おひこセイフン玄琳 振治橋 和ゆうのゆうげん通一丁目ゆゆ
ゆゆゆ同二丁目ゆ例ゆ〳〵ゆ町裏ゆゆんせ二年ゆいづも町西裏
今春七郎ゆあり〳〵ゆを八ゆ町又作川町の小ゆも八ゆ町有山玉
法院西今の辺ゆあり浦紙橋辺ゆり南八丁堀ゆゆゆ流 寛永の所ゆ有

教寺あり〜〜の塔〜〜移りて今深大寺に改まり

明暦元年乙未　四月十三日改元

梅翁句集に年号改元の記因

明暦や梅のあ〜〜ふひ〜〜るか

とうふあり改元に月あり

○下谷広徳寺創開山無蛮和尚　和尚寛文元年廿二月弱日寂八十歳墨子大円宝覚国師と諡号をあり

○玉川上水今年ほり金〜〜減能せ中嶋田岡言ほか

○市谷天安寺月桂寺こと〜〜〜〜

○六月廿五日於本所二ノ車　称九左衛門

号石原人浅草法報寺年　○九月朝鮮人来聘　正使翠屏翰林副使秋潭諭陽従事南竜翼旅宿年誓寺と韓人見光山教道を

○十一月十二日医師板坂卜意卒　名如春浅草寺中一医王院ほか墓碑を林氏号撰也一碑天保若院ほあり卜意八浅草砂利場の辺ほ文庫を建和漢の書籍を収め浅人ほ縦〜むこれを浅草文庫という　同〜江戸浅草浜町の小裏ほ塙田加州侯の邸下中ほあり江戸いほ大なる土蔵を造りて内ほ和漢の史籍万巻を

納へられ世ほ浅草文庫と称〜〜るをいう

同二年　丙申　四月改

正月廿二日夜赤雲西ほあらる○正月ほ梅びせのゆ月已の刻安ほて

て〜〜家の棟〜おびたるるの若し〜かゝまし〜〜ちを今年〜〜

○浅草寺山門の仁王尊この江波を奮るこて世ほ云ふ〜〜〜〜浅草

寺記○六月赤雲西方ほ見る年のあくほ二年あり

○六月江戸より親世子勅使長沢　邦田信古田矣の裏○浅草ほ於て狩猟

飛を建○十月九日吉原町を江戸代地として新吉原ほ移

塀の地を日本堤の辺　千束の内田地あり　ほて下さる〜〜引料として今年〜〜〜〜

小石川十丁ほ〜〜　下さる〜〜旨命せらる○十月十六日夜吉原町より出火小風

強く中橋南鍛冶町桜町辺類焼

○十二月十六日茶人今森雲及慶庫 名長迫号宗知

明暦三年　丁酉

正月元日に谷行町火事　五日吉祥寺中の町
焼る○正月十八日乾大風京刻より車に乗て同裏車妙ちより出火
湯島神田を焼筋違門内町屋通町筋藤金沢岸京橋八丁堀
星巌寺浜鉄砲洲海手佃島深川まで翌十九日巳刻ほ石川伊豆殿
新寺通町より焼出し牛込出つ田安出つ神田橋出つ常盤橋出つ
呉服橋出つ八代洲河岸大名小名屋敷寺院橋出つ焼亡又同日昼
町麹町五丁目つゞき　より火出て半蔵出つの外桜田虎出つ雲宗下坂上屋つ門
前札の辻海まで焼亡然る焼死人四万以上の出家武士百姓宇治殿
七百七十隊宇佐し組屋敷数を尽し公家社寺五十隊宇町屋

四百町行町八百町焼死人十万七千四百六人といへり後て本所
二町四方の地をあひ非人をして死骸を船にて運しめ塚に築て
ち院を建て回向院と名つけしめり　去年十月ヶ為年正月ホ
陸ホを及ぶホ一日ホ五て大雪降深積一尺
ケ条揚して焼民の困苦を思ふに及路ホ悲泣
正月廿二日より七日の間火災ホ
多ホて肌憧ホ及ホ所〳〵ホ於て粥を施す又町々に限る子名
吉方厚同　今ホ一て十六万五千四百二十五人
二百三十六人八分ツ
ケ〜むさ〜あぶ
ケ月九元〜ケ
視聴雑集　江府田舎の復仮ホ屋を造りひさホ人を求むを乃て
ケ〜ぞいひあ〜ぬいたむ法のケホのケ小屋昆陽ホ世の中の寄き治し法　吉川惟足
正月下旬吉原町小屋掛を命せ〜る　事源今考ホこの時一旦左市の内今の浅草
六月今の地へ引うつり新吉原町と号し八月ケり商売をなすむ

明暦三年四月江戸大火の江戸終焉の内元吉原二丁目江戸十三丁すじ町京町新町の名ありて
揚屋町の名あり〜此元吉原二丁目の地を今の地にて京新橋ふして代地をあたり
〜所すじ町の向ふ〜あらしふ町をひ〜きこれを二ツ町の中ふ二軒二軒ありし
揚屋を一ツふあつめて揚屋町と名つけ〜とりえ地の辺にまより三筋町伝馬
町紺屋町ちぢ〜屋の名目あと
ふまりめてこれ町名ふ移ると云く　○三月廿二日羅山先生卒　七十五才　墓ハ麻布長円寺
の西隣牛込山伏町ふ移る　○大火の後江戸中町家瓦葺を禁ぜらる　別業ふ子孫十一人

洪範図紀事

東本願寺新田明神の下加賀屋敷と唱へる地の西ふあり〜此屋敷
中源寺今の地へ移さる　大火の後あらし〜此東今加賀屋と唱へる地と本多
肥後屋の西中ふ元花房町の西ふ本田備中屋敷ありしを外に辺
皆武家屋〜地なりし〜ありし西ふ新橋山町の辺とう築地へ移る
○武蔵鐙（あぶみ）こしらへる革紙ふ　此度の大火の後の事をいへる俗ふ白紙町
とり柳原と町屋一丁目のけ〜れ元ふ二丁目ふ人ふ石を以て東西十町

あるり小土手を築せらる日本橋の南茅町とり江日市近の町屋を
ふりの所ふ移さる江戸川端ふ土手をうけ東西郡町ふ移さる
上〜ふ又日本橋より京橋まて八町の間ふ町屋二ヶ所を元のけて
今所二十ヶ所〜ひろくあまり是ハ町屋移りふせきゆひ浅人ハ
上ヶ人迄ハもと狭い火事を恐れ人をそこなふ事の度〜ふ移ふ
四ツ土手を築さらハ江戸中のものいふ流事ありしも遠ふくるをもと
為しこの由なりと云く
○火災の後まて日本橋通江丁目北の側細き道を立鍋町（たてなべちょう）といふ洲所ふ
墓石（ぼせき）を作る立居さるゆへなり
○災後茅場町ふ茅〜茅商売の五ヶ所を橋向へ移さる是後元禄
始の江戸中所江戸ふ移さるとて本所茅場町といふ

○世時武家の隷郎後藤兵衛又寺院も所々あまた有右祥寺
永久橋とり移る（永久橋四谷祥寺橋とも云ふ表つの通りあるゆへなり
寛文元年江戸焼ふも本右祥寺橋ともあるを
霊山寺源空寺浅草寺いつれも湯所なれ共大火後浅草くりやふ
橋本願寺橋とり谷中へ移る報恩寺八丁堀とり深川へ幡随院
院因幡寺（今の兵部橋の西へ）誓願寺（今の小柳町辺）祐田とり深川へ雪隠寺天嶽院あさ
草庵門内とり浅草今の地へ移る
○世時代今の如き炭食を前にすのみ也麻布後今市山乃
門おふ始て薬屋豆腐汁黄蘗大豆をとるのみ也民家と名
付けしかせしを江戸中皆とり合市山のあるもの哈ひふ四うん
とて孫の外孫なれ共真しるとあり
○浅草見附赤坂御門外世時勝屋利兵衛と云ふ祝者あり始く

猫牙船を製造して山谷通ひの客こまを乗る又所々とり出きる
乗りて通ひしもあり（弁漁考に猫の毛紙を要し　そるの日のと
とるこのごとくなり）○染頓（染ばがき）しい小唄（こうた）流行（りゅうこう）
しもいとろの事あり（ゆるとけて柳さをるかくそ咲きそめ
寒ふも一ツあそ
ぬるひあり）○明暦元年山崎宮（あんさき）の遠忌（おんきき）行ふ（ぎょう）
一ツあり（こと）を始ふ（はじ）ふ声（こえ）の和（わ）を以人（ひと）倫（りん）を教（おしえ）
のはまてもあり（ちゃう）○筆曲（つくこと）柳川検校（やなかわけんぎょう）八橋検校（やつはしけんぎょう）行る（八橋八寛文の末ふ発る）
○明暦二年の江戸図大坂町（今天満る町一丁目
うゝ坂あり）ひのもとの町（今小舟町
二丁めあり）
あり外田撰稲町の濱平幸吉とあり

万治元年　戊戌　十二月国　七月廿三日改元

正月元日夜市谷安養寺こ世秀雲の美ふ白衣の老翁形色
和尚を訪し日枕とありて右の社を建立ありし

とり果て著しと江戸砂子ふいえり

○正月十日本所ゝ今のとり町火引横江戸中大半焼亡　永澤

○二月本挽町海辺赤坂小日向等築地出来る　外記に麻布の築土の西之小日向築地の内この山を引田と称地蔵を祭るといふ

○六月九日猛風雨　中村勘三郎宅迴り　○夏二図の地ふ金澤辺に別荘の地をめぐる堀地ハ海辺堀ら老郷ふ通し喬源なり別堀塚と称るもとゝく松樹を植てく遠堀を標せり　寛文十二年夏弘文院林宏之等田宅の記を飛る

○牡丹雲師澤氏寛永中発ふの狂言ら名を蓼ゝら後遁世して道仲と号ゝ橋切絵原ら続ら沈の辺ゝ住て江の澤を綿く

本願ふ本堂再建の願を記ゝ又沈の井ゝ弁才天の小祠を建ら今年七月廿七日七千隊寺ふして法ら　洞房清宴

○八月江戸中髮結株一町ふ壱ケ所ゝ八百八株ふ定る拾ふ江戸町数八百八町ゝいふ事此時代の事ゝ　寛永のあゝ四ゝ八百八町のるを記せり　今ゝ千六百隊町ふ及ゝり○今年日本橋古善清源る○九月十三日唐僧源元禅師拾及善門ゝ来ゝ江府ふ来ゝれゝ時湯島祥院ふ七十隊日逗留あり実説拝集ふ　この時敷六十九ゝ云

○同浄心寺寂剣　冠山日義上人　○日蓮暮里経ふ寂剣　冠山院元禄作

○吉山淳閑称義江戸ふ遊秋場ふ遠遊紀行あり

○今戸村百姓九郎右衛門男九郎助畑中のゝふ立ゝ稲荷の社を右ふ〈移ゝ是を九郎助稲荷のゝいふ○九月明の寂師國性爺鄭成功本邦〈援兵を請ふ　名八芝龍又森宦ゝいふ今年三十九歳　日本の寛文六年ふ来る

○東海乃名不記成　民井りゝ作　寛文中板行

万治二年　己亥

正月二日より三月廿四日まで火災百五度ほどあり人安堵せざるあり〔玄蕃叢書正月十二日廿日江戸大火とあり〕○日本橋を掛替らる　武事著聞集の橋史にしるす

氏時語て曰橋擬宝珠ほとりにしるしいうあるん寛永の頃づまりぐの墓ゆもぎやうしのありけるを見て思ふに次といふ人さうり好るとなり

○二月山崎宮神輿再江戸より遷八月厚木に再遊紀行あり

○廿一日小田原山王権現社今の地へ遷営今日迄遷宮あり　稀地に出張ほとりに表長屋の出座表

○朱雀水出る明末の兆を遷す

○七月二日大風雨洪あり　俗説に出羽二俵を流す浸る

○九月濃州元浪法師妙を説く山に詣ける次に江戸へ下る

紀行年史紀といふ

万治二年紀　万治二年己亥

九月九日江戸へ帰りてくるほど上人笈ゆくおもふとなく笈をねこそ歩て江戸へ

数きねたそうまほど日本橋のもとつくに二階ある所ほど月を見て

日本橋邊日本の秋　更無一事撰心頭　今宵新見江城月

影満扶桑六十州

せてき布ほど並居てつまくくある俗ほど唐のやまとのくさくさのくさくさ

紫日あらはりはん家ハ行脚ほど寄よみてんを中うとも有り毋ハ六日のあ

さよりそこの筋ほどのくさ居ゆくはきほどの余ほどほどこちらそうろめさ

ゑる附あり武附附殺ほども猿宿の月といふをよまくそよめる

ふさとまてくまるあ紀新も猿ころも神のくさ墨るむさしの月

う紀あるう猿ひとまほしいまほど物る歌をほど紀武蔵附くつき

月もまくまるとまるひまそせすこ国ハ紀ほどひきほどの猿月ほど

○下谷永昌寺ほど下谷長者　長者町八丁目領居の所ほどの墓とてあるとは光院殿お墓

玄安居士万治二年亥九月廿九日とあり年号ばかりしけまハ銘し

けるとて長老の子孫あるとの墓あり

○神田川堀割の事仮家屋へ命せらるる今年法華経堀る所年

ふいとり大川とり柳原通り山茶の方下屋敷迄右堀り舊地例と

外迄ふいとり清水御廓山堀かなして大川へ通ずと成る（此掘土を以小石川小日向小築地お

東西両所に成る此外八赤城明神下とり同白ふ勅免まで田畑あり江戸川八

小石川へ接てあり飯田町下の堀とあハ江戸川の堀留なり一説なり

○今年とり本所深川浅草海ふ地を築立をひらき川を堀一橋

をとり武家屋敷あり此所ふ市宅あり後天和二年回向院と今の

浜町堀（ほり）

浜町堀ふ廣小路の通り町屋計除りなり外本所の武士地町屋ハとり

て元の田畑となり元禄元年又昔の屋敷武士地町屋となる

○十二月霊巌寺深川へ移る此所ふ深川町屋となる（此地ふ昔ハ中島ふ橋ふいなり往のこと

今ハ移る）○十二月五日吉原二浦屋の名妓（めいぎ）なる尾花転（てんよう）芸妓名伝女と云

山谷春受院ふ墓あり又同西方ふ墓もありて万治三年とあるハ誤なり辨世さ和尚ふ

ふもとなる紅葉ふ

（是ふとり後ふ尾ハ人あり山本菊の亭ふ考ふ考あり又押亭菊

のふ尾考一冊あり

赤樣年上せし）○今年とり江戸町へ新吉原へ移る

万治三年　庚子

二月十二日十八日大火有て江戸諸叢ふいとり

○谷中安穏院七面宮再建○本所回向院建立成（此歴丁回院死千万七千

廻人の死骸を葬り

一宇を剃髪あり信者ふいとり谷中安穏日蓮ふ会佛を唱へ堀上宗祖像の彫花を造り安置

し又山門を建る通る二世住職となるとこの山門元禄の火災ふ焼り今ハ一間ふ

成ふ代ふとの迄

をも出来とり）○両国橋始て掛る

幅ふとり長九十六ふ始ハ大橋と唱り後ふ大橋

橋と唱あるとと云書ふ万治二年ふ出来とあ

あく江戸ふ橋て最後せ一ふ川村瀧見今の西を見立て云上一掛けるとり江戸方

流矢の災

ふ一とあり

題両国橋

杜梁新建拗長流　人是陸行吾在舟　疑似猛竜横卧勢　鷲峯先生

總州為尾武為頭

○本橋町五丁目ヨリ森田を形ち畳敷にて芝居興行仕候代く勅ふ と号仕

○五月霖雨かろ○九月廿五日に初て基所二世大橋宗桂率 二代板上行ちふ 初基所飛の名稱

を立○むさしあぶみ二巻作行 此書大坂のうを流行とふいつり

此年間記事

上野ふ金銅二丈二尺仏の大仏の像出来万治の比ふ食涼雲再建也

元禄の頃仏元禄ふ いろう寺宇を建めり

○芝口日比谷稲荷社勅諸

○大久保法華ゑる七面宮勅請○明人陳元贅彼国の礼を遁ありて

本邦に来り江戸三田春町永寿山迦葉ふ偶居せしに浪人

後北条氏蔵磯貝次郎左衛門三浦与次郎つふ語りける明ふ人を

捕りる術あり孤を投をはるるふ方ふくありといふ二人此術を学

元禄を以て紀州流案御の始元禄ふ寛文十一年六月九日八十五才ふして

尾張ふ終まり紀州流案術後北氏ふる国

長ふ本佐ふ名ふ中ふ安ふ中の人ふ中ふ門人千百人ふ及ふりとあり

○万治の比後北氏の新川の辺ふり酒楽ふつる者比江戸ふ出ふり法人の

駄ふ紙帳の内ふ入ふく昭和八人の後を殺りしてふ比ふ一代女といふる

芝ふ紙ふりふり八人等のふりあるふ

寛文元年　辛丑　八月閏　十月廿五日改元

正月十九日の夜光物ふ出ふり此ふ光物半町程ふ行ふ一天

昼の如ふ○正月廿七日麹町辺町ふり出火大久保の辺飛火橋宗橋の辺

本橋町まて焼家方町屋殿ふ焼ふ焼亡○勅進相撲今年ふり毎年

続ふく興行ふて○二月ふり伊勢宗庸男女ふ乗ふる事殿し

○三月十二日林漢耕斎卒 三十八才名を信号函三子 藤樹ふて春徳と号仕

○正月年号改りし事

[illegible]

辛酉考不審川を角ろ文
東北のすさびあるべし

○六月今度小石川伝通院塔頭末人段清蓮西深川に不速流水洪川
に[illegible]稲さる○秋九月年末の豊作と云

○八月二ッ谷傾城屋不統く出る事不安の事を得しる

○十月廿八日江戸大火あり[illegible]中清清左衛門西[illegible]あり[illegible]

○十一月二日浅草塔田某侯藩内[illegible]塔頭[illegible]より火を出せ[illegible]流
焼亡

寛文二年　壬寅

[illegible]く松師今年より七月不元拂[illegible]十六日[illegible]○正月中[illegible]奴りの事[illegible]

[illegible]閉[illegible]又[illegible]沙汰[illegible]江戸[illegible]を得ぬひ又[illegible]町の
河[illegible]一[illegible]を得しる

○正月廿八日元祖[illegible]作年九十一歳[illegible]賞[illegible]の[illegible]平沢氏
[illegible]代[illegible]

○三月廿日年刻大地震○五月六日より廿日まて日月[illegible]の事紀の
[illegible]○九月年出[illegible]○九月廿三日小[illegible]

分の[illegible]江戸[illegible]定板[illegible]川

○九月麻布一本松不[illegible]の地[illegible]

○江戸名所記[illegible]汗　七巻[illegible]井
[illegible]

○市村[illegible]右近[illegible]海[illegible]
[illegible]の[illegible]世[illegible]

同　三年　癸卯

正月廿二日後[illegible]七代[illegible]○五月天下[illegible]令して殉死を止めし

○六月十五日[illegible]善不[illegible]谷安[illegible]稽[illegible]社[illegible]清

○羅山文集刊行 百五十五巻六十本○亀戸天満宮今の地に営建(ちくけん)せらる 心字の池及橋出来(しゅつらい)す 七年八月祭礼神輿汐列(しおれつ)あり 後式宰府の例に倣(ならい)て本所の地を巡行せし橋詰白集に安藤右京亮殿の記(しるし)ありし所なり 其時(そのとき)の模様(もよう)は 本朝編年録(ほんちょうへんねんろく)を本朝通鑑(ほんちょうつがん)に引(ひき)あり

○八月十五日亀塚(かめつか)流海(りかい)の墓山会(はかやまえ)を和尚(おしょう) 仔皿子(こさらこ)乃供(のくう)とも 墓基(ぼき)有 念仏(ねんぶつ)三昧(さんまい)を修(しゅ)して供(くう)せり○今年より天和(てんわ)二年に玉川(たまがわ)て亀戸村(かめどむら)に蔵(ぞう)を建(たて)て

年安分度(ねやすぶんど)の洞俳を鎖(とざ)して諸(もろ)の西(にし)と云(いう)俗に耳白(みみしろ)と云(いう)婦(ふ)多(た)く亀戸(かめど)に居(きょ)住(じゅう)あり 橘義白集 江戸市中(えどしちゅう)に娼婦(しょうふ)を置(おき)て「すゝ風や此(この)家(いえ)

天和(てんわ)
一五七二

寛文(かんぶん)二(にん)年 甲辰 五月(ごがつ)閏(うるう)

○賀(が)墨八幡宮(はちまんぐう)假宮(かりみや)○服田町(はったまち)法華(ほけ)私入(しにいり)を命(めい)せらる

○けんぜん蓄書(ちくしょ)切(きり)売(うり)る 価八孔(かはくこう)云(いう)○七月七日連雀(れんじゃく)町(まち)星村玄俊(ほしむらげんしゅん)卒(そつ) 九十(くじゅう)才(さい)

○市村作(いちむらさく)恵玉川(えたまがわ)を掘(ほり)て花(はな)を植(うえ)る 元来(がんらい)芝(しば)居(い)に演(えん)ぜし引幕(ひきまく)大(だい)

(巻)に具(ぐ)せらるゝ

同(どう)五(ご)年 乙巳

正月五日連雀町(れんじゃくまち)星村法眼玄陳卒(ほしむらげんちんそつ) 七十九才(しちじゅうくさい)

○秋絹布(しゅうけんぷ)の長サ二丈六尺(にじょうろくしゃく)に定(さだ)む○八月(はちがつ)有高人(ありたかにん)数(すう)の古死(こし)を祭(まつ)り

く見(みせ)せる 舊(きゅう)まゝ有市神(ありいちがみ)に合(あわ)せる

○八月(はちがつ)弟子(でし)の医師(いし)三雅春節(さんがしゅんせつ)江戸(えど)へ下(くだ)る紀行(きこう)あり 蓬舎紀行(ほうしゃきこう)を

合(あわ)して二部(にぶ)集(しゅう)と云(いう) 其節(そのせつ)八(はち)幡宮(まんぐう)又有職(ゆうしょく)の故(こ)実(じつ)あり 今(いま)解(かい)も武人(ぶじん)に行(おこな)せり

○霜月(しもつき)宮(みや)を安(やす)立門跡(たてもんせき)下向(げこう)の時(とき)隅田川(すみだがわ)を

渡(わた)らせ給(たま)ふ所(ところ)の要(よう)を和(わ)して云(いう)江戸(えど)水(みず)道(どう)見聞(けんぶん)之

○佛(ほとけ)の澤(たく)秘録(ひろく)の要(よう)を抜(ぬき)て云(いう)江戸(えど)水(みず)道(どう)見聞(けんぶん)之

又(また)町(まち)小(こ)伸(のぶ)達(たつ)之(の)弟(ていし)子(ていし)廓(くるわ)長谷川(はせがわ)助(すけ)蔵(ぞう)といふ渡人(わたしにん)渡(わたし)を菴(いおり)

入魂し一人くの女人或は男女の懸物等の行愛して御
物を交まるる或は座敷のり息女縁組の事ゆ有ゆをうまくよろこぬ
さくみをあせしうい事ゆ家那して寛文五年八月迄新せらる
其後ようして諸社をあ所人家を蔵といひけること云く

寛文六年　丙午

三月廿六日人形のおくり死光物ゆ有ゆ之二文流しらん
○所受所施の僧配流　○東叡山瀧揚建所の建
○中村勘三郎ゆ芝居あそ始を[illegible]　[illegible]芝居年代記ゆ
○九月一日林梅洞卒　二十四才　公教号梅洞勅亭　後ゆ春信と称す
○芝金杉海辺百姓ゆの地を細工切洋所し同十成年九月町割
ありて新網町といふ

同七年　丁未　二月改

三月府中六所宮法再建
○四月浅草并大納言下向の時南田川ゆ多
ゆ所名の新宮を[illegible]隅田川ゆ[illegible]船人　船渡ゆ
○五月堀井宮隅田川出遊覧あり
おくそれんゆ[illegible]ゆ須まていとしく新ら遠き隅田川ゆ
○七月の末玄川堀ゆ和神道の学をのそ　[illegible]堀ゆの翁八神徳ゆ
源くらけ入て四重の
表をひろめ[illegible]ゆ表を新せしゑ又年ゆもよみて世ゆ貴せらる視音堂ゆ[illegible]
視音堂集　本所の社地弥所の後神堀ゆ新りて新ひけひられた
神垣のねうひゆ[illegible]て[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]
あるくあり本の所をのくしゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]
[illegible]外三百あり社地をゆ[illegible]の神社あるべし本所
の地むり本所と[illegible]を元禄元年ゆ所の文字ゆあくこゆ[illegible]

おのつから本のところとよめるにてしるへし
此頃より本所へ出しく知しとなり
○同黒谷直指院満誉寂翁上人青山長応入寂す　直指院の満誉とて本所の霊あり念佛の眼仏を勧て
あまさこなしに本所に住て安直院同本所に庵を結ひ件来の人をして念仏をすゝむ寛文六
年々二月彼岸念仏の時限年十月廿日往生せんことを知りて諸人に告く又西念といへる
もの志ありて世の中の無常を感して発心し妻子を捨直指の弟子となりけるか
師に先立て往生せんとて今年十月十八日十念をうけ七日は穀を絶大臣と成て往生の寂
衆を勧んとて剣をもて穴に入諸人念佛の声と共に土を投入て断時に浬む又満誉
も十月廿日に至く念仏数遍に及ひ辰の七つ時にして眠るか如く往生し江戸中感して知
らさるもの無く諸人群集せる事類しかり
しといへり以上江戸名所記の文を畧す

寛文八年　戊申

正月廿八日乾の方より巽の方に竿のことき白気立夜に至りて消る
○二月朔日未上刻牛込酒井家の下屋敷より出火にて薬園寺町法徳
士町市谷田町に至る同日又市谷天龍寺門前より出火にて納戸同心
屋敷及法雲寺通同心屋敷上淨瑠璃坂武家方六番町へ飛火して五番
町二番町糀町一丁目より六丁目まて桜田辺諸侯屋敷悉焼亡山
王へうつりに込て武家方新橋まて海辺に至る又京橋の辺上より
出火八駿河台辺神田橋鎌倉河岸日本橋まて焼亡二方の火ひとつ
一所になり武家町屋数く焼失せり又同日未刻四谷行畢
より出火にて大名屋敷数多焼○二月二日日輪二つありしか如く見ゆる
○同月四日辰下刻鞘ヶ橋より出火にて大名屋敷数焼赤坂町ケ
日ヶ窪へ飛火して三田寺町武家地ある綱坂屋舗子まてことく焼亡
又同日下谷車坂より出火下谷池端士町屋敷連続本郷まて焼本
所へ飛火一二の橋町屋焼亡○同月六日未上刻小日向築地武
家ことことく出火にて牛込通町牛込法門の内へ入諸々焼て田安の門
のうちに入又桜田屋敷より出火して本郷通町飯田町冬青樹

坂をまて焼亡　去二日のひる本郷屋敷二ふ百餘軒町屋百
二拾七町餘寺院百廿九宇百姓屋敷百七十軒といふ
○二月吉原廓内より出火をひ〻死傷町伝見町と呼沢伝見丁ハ年寄の
古板なる故なり名つけしとそ　○二月町人常刀をとる事を禁ぜらる
○二月罪人本町下向れ時
月蝕も禁ぜ為して作き見る雲を雲ろの家とて名字死名井
嘉章公
○夏猛暑　○二月ころ雷雨の虎の皮つと
幸橋内つのるく粥稽を撫ぐる　はつとりつ
○粥宿ころ半宝小坂塚村千土中を穿ちて金像五寸の観世
音を拾ひ背の刻して弘長二年二月とあり墨人常吉を
営て安置まて夕都の観世音霊なり

○十一月十三日後花八代帝崩御　歩行後西天皇
歩行後西天皇ハ
○昔く拾遺の云むかし〻
万日の回向拾とて人集ひる事ありし寛文中年ハ始るとあり
寛文九年　己酉　十月回
二月二日濱第十五堂焼亡　○二月二日流星東ハ行雲のやう
○奉公人お暇り二月二日ありしより今まとり二月五日と成る
○乗戸て満宗社地不法地坊を勧請し社を営む
○七月振美人礼をあ〻十月まて不松茶屋とり平ぎ〻る
○七月十八日俳人石田未得卒　八十餘才歳　世々彩色千蓉
○八月十日大地震
○大阪河原濱屋敷　屋敷人作と乗久左馬寺井喜左馬叶
栄雲泉市左衛門なり

寛文十年　庚戌

五月十二日辰下刻より巳半刻まで岸の如く成相隆（ふかのごとく）

○八月大風○弓箭侍那和恐兵戈天社の祠不地を築立小堂を建内外の書籍を収て法人小をしまびして紙とろ〜む天和二年東えの宋学寮を立宋籍をこを弁ろを　○本朝通鑑成二百七十二巻　羅山鵞峯二先生編輯

同十一年　辛亥

弓箭侍那和恐湖中新小築く和の地へ編笠を建る

○白金陽堂を寛創　長山本菴作　芙蓉館形之

○七月後水尾法皇毬戸天満宮へ宸筆乃額を贈る○青山流義を寛創

○七月琉球人来　巡使令武王子　日光山へ参詣を

○八月廿九日南大風雨波多　濱茶不給　小日向玉那

俗きの人家庶之多多の年和辺の都く那揚を多ふひとる六々掃杭五十万隆あげる

○十二月十二日晴天震動あり

豆腐あろ所隆

同十二年　壬子　六月室

二月二日年迄淨瑠璃坂敵討あり　実平源八と云ふの堂をうくひ親のうくき　同姓平人一彩を付ち遠流不ませる ほとと

江戸名所記ゆくき紀のひとりふありその比の彩平ナ「くられきこ

源ろり坂のうこ紀討さえも遠流されまけり延宝六年二月ふあり一続れ般考有

○二月勅を左弁樂ふ南貨比事を止らま大佛を芸のせ町中勧を

ひくこ比すの芸うぐうこ豆結の行人南れ寧繁あり　うぐうこ人倫川蒙　図彙ふのせて越繁の

男行後ハ刃をうぬきこ

形の越芸あて統叫あり　○国六月晦日大橋流筆道祖大橋主政率　おを結沼

邑空繁ち

ナ蒙比　○七月十一日狩野元俊秀伝率　八十五才

世年同記事

去の年

不忍弁才天の島へ石橋を渡して参詣の通路と比　山法八寛今郎中ふ　築く不ふて難儀

しあて紀あるくふ

形西あるくさりしこ　○品川御殿山へ桜苗を植させる

○軍学者山鹿甚五左衛門（名八素行浪人なり）寛文中澤を把て古を濟世廣の邸に幽せしを延宝二年に終り免して返さる（貞享元年九月六十七歳にて終る年迄宗教を著述し著を山鹿流十八部の書を編輯あり）○江戸にて代八車を作る八人の男に代る故名づくと世事談綜に云（紳士の大八と云ふものに川筋紀と云ふ書に記す事を載せ）れい大八車にて今も利る事と記す

○始て元結を製（案の一本に延宝六年の頃の麻布に住る故の下に文七元結と云ふ名物の元結を拵るとして世に流行す文七と云ふ者元結を製し人の名に刻ひしるべし其角の著述町奴の任侠の隅に元結を製しる事も見る）○出羽代男保年六方組を作り深夏十五歳にて死す

朝首あり〻〻〻〻○去の頃鄙諸所未詳事多し一夏三度諸手

咎所なるあり〻〻〻〻○降達節（降達は京の祇園の侍なり世に古今の元和寛永の頃なるべし祇園にて曲節を一流へ）義流節土手節加賀節等の小唄流行

○淀の川船井丹波掾（寛文年間）虎屋永閑近江屋源兵衛土佐掾

藤慶外紙長門掾石見掾紀伊掾（淀の小唄の事は京の声曲新纂に詳しく）

○春鶯殘魚鈴の事江戸に紀る人あり〻〻〻〻寛文中上総国の紀氏大内仁左衛門と云ふ者鈴炮術に於て殺活の術を演人

を殺すべし（安永三年下本）

○去の頃侠客の頭を按上る事一行を一〻〻〻〻浪人の宗因江戸に

住り〻〻〻〻肥深見十左衛門の家を見て「名月や東に日なり北

家さま」是廣く按上る由なり唐太びさひい唐太橋を東の

家つきより出る由〻〻〻〻橋を傍い兼意のおろかなる〻〻〻〻古〻

（仏神に云ふ事なり）

（もとこの男達なり）

○寛文十一年より十二年近撰行せる遠近道中記江戸図有（五枚半分川）

此外新編諸近雑記者多い青山淀若狭八幡水口彦根日本橋

南二丁目經師加会傍校とあり　郊祀をかゝる事
こまかに考る所

武江年表巻之二畢